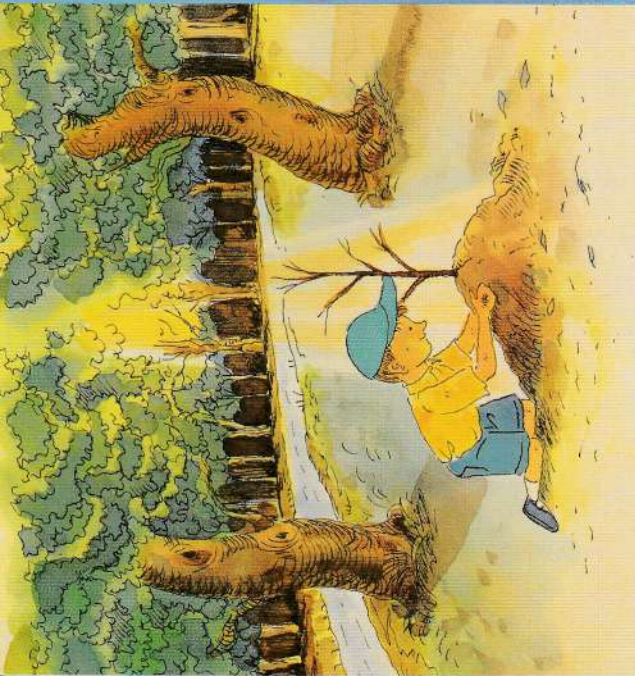




自然と木の童話集

森はえのりぐら

W O O D Y F A I R Y T A L E



C O N T E N T S

第1話 家になった木

P1~12

第2話 自然がおしえてくれた

P13~20

第3話 終わりはないの?

P21~28

3つのお話のしめくりに

P29・30



※リブレ (livret) とは、フランス語で小冊子の意味があります。



「家になった木」は、人間の子供に育てられた木が
家になるまでを描いたものです。

この本を、子供さんに読んであげる二両親の中にも、潮風の中、裸足で歩いたホドウオークの心地よい感触、高原のログハウスの室内に満ちていた清々しい木の香り、素朴な温泉宿で出会ったヒノキ風呂の湯のまろやかさなど、忘れられない木の記憶があるはずです。さらに、その上の年代なら、木と暮らした思い出はいつそう鮮やかさを増すことでしょう。

なぜ、木は私たちの琴線にふれてくるのでしょうか。
それには日本という国ならではの理由^{わけ}があります。

豊かな光と雨。森林をはぐくむ条件に恵まれたわが国は、世界でも稀少な緑の列島。東西にのびた地形は、ヒノキ、スギ、マツ、ケヤキなど、豊富な樹木を育てながら、世界に誇れる木の文化を生みだしてきました。

たやすく手に入り、強くて、しかも加工が容易。湿気の多いわが国の気候風土に適したその特性。美しい木目や、やさしい肌触りなども、細やかな日本人の感性と調和するようです。日本人が木で家を建ててきたのは、“自然の理”にかなった行いなのです。

“休”は、人をあらわす^{にぎふ}“イ”が“木”によりそった字形。辞書には、「休む」、「休まる」、「休める」などの読み方があり、古くから日本人が、いかに木にやすらぎを覚えてきたかが伝わってくるようです。

森の中にいるだけでは、人と通いあえない木も、家になれば人と通いあうことができます。実際に、木にふれ、木と暮らしてみると、自然から与えられるものが、いかに豊かで、かけがえのないものかがわかるはず。

このお話は、家になった木が、育ててくれた人に“ありがとう”を伝えるところで終わります。

どのような自然のやさしさでそれを伝えたのかは、巻末の「三つのお話のしめくくり」をお読みください。

家になつた木



森のなか、大きな樹木にかこまれた日あたりのわるい地面に、小さな苗木が生まれました。昼間でも、うすぐらく、ひんやりとしていて、ときおり、空をわたる鳥のなき声が聞こえるばかり。森は、百年、二百年といつ、深いしずかな時間をすごしてきました。そして、かわらぬ生命の営みをつづけてきました。この木の赤ちゃんも、秋に実ったドングリが地面におちて芽をだしたものだ。お母さんはとなりの木です。でも、人間のように話しかけたり、世話をしてくれるわけではありません。幸運にも、こうして芽をだすことができたが、太陽の光がとどきにくいここには、いつ枯れてしまうかわかりません。木は人とちがつて、生きてゆく場所をじぶんからえらべないのです。

この森から丘をひとつこえた谷川のちかくに、きこりの親子の家がありました。川からはいつも気持ちのよいせせらぎの音が聞こえてきます。小鸟たちも水を飲みに集まってきました。まわりに人家の少ないこの山のなかで、男の子はきこりのお父さんのあとについて、よく森にはいりました。しずかな森に木の幹をうつす音の音がびびく。そんな時、森はいつしゅん、身をひそめ、親子のようすをうかがっているようでした。丸太は市場に売りにだし、のこった枝や葉っぱで飯をたいたり、お風呂をわかす。伐りたおした木は、ひとつも無駄にすることなくつかいました。川では魚が、森ではキノコや山菜がとれました。山のくらしは素朴でしたが、そこには季節ごとにめぐる恵みがあつたのです。

ある夏の日、昆虫とりに夢中になっていた男の子は、森のおくへ、おくへ
 とはいっていき、小さな苗木を見つけました。その時はもう、たおれそうに
 かたむき、いまにも枯れてしまいそうでした。かわいそうになった男の子は、
 ていねいにまわりの土をはりおこし、よく肥えた日あたりのよい場所に、
 苗木をつつしてあげました。それから、なんどもこの木のところへやてき
 て、元気に育つように世話をしてあげました。

季節はかけ足でめぐってきます。木は紅葉をはじめ、山は錦のころもを
 着たようにあでやかなすがたになります。やがて、夏にはあんなにやさし
 かった風が、別人のようなつめたさになって、葉を枝からふきとばそうとし
 はじめます。冬の到来です。小さな木も、寒い朝には、その頭に白い霜のか
 んむりをのせることがありました。男の子は、子供に服を着せてあげるよ
 うに、小さな木のからだをワラでつつんであげました。男の子は、すっかり
 木の親になった気分です。ちかくに友達のいない男の子は、今日あつたでき
 ごとを木に聞かせてあげました。山のふもとにある学校のこと、木から木
 へとびうつり仕事をするお父さんのじまん話。風のいたずらなのでしょ
 う。そんなとき木は、小さな枝をゆらし、男の子の話にこたえているよう
 でした。



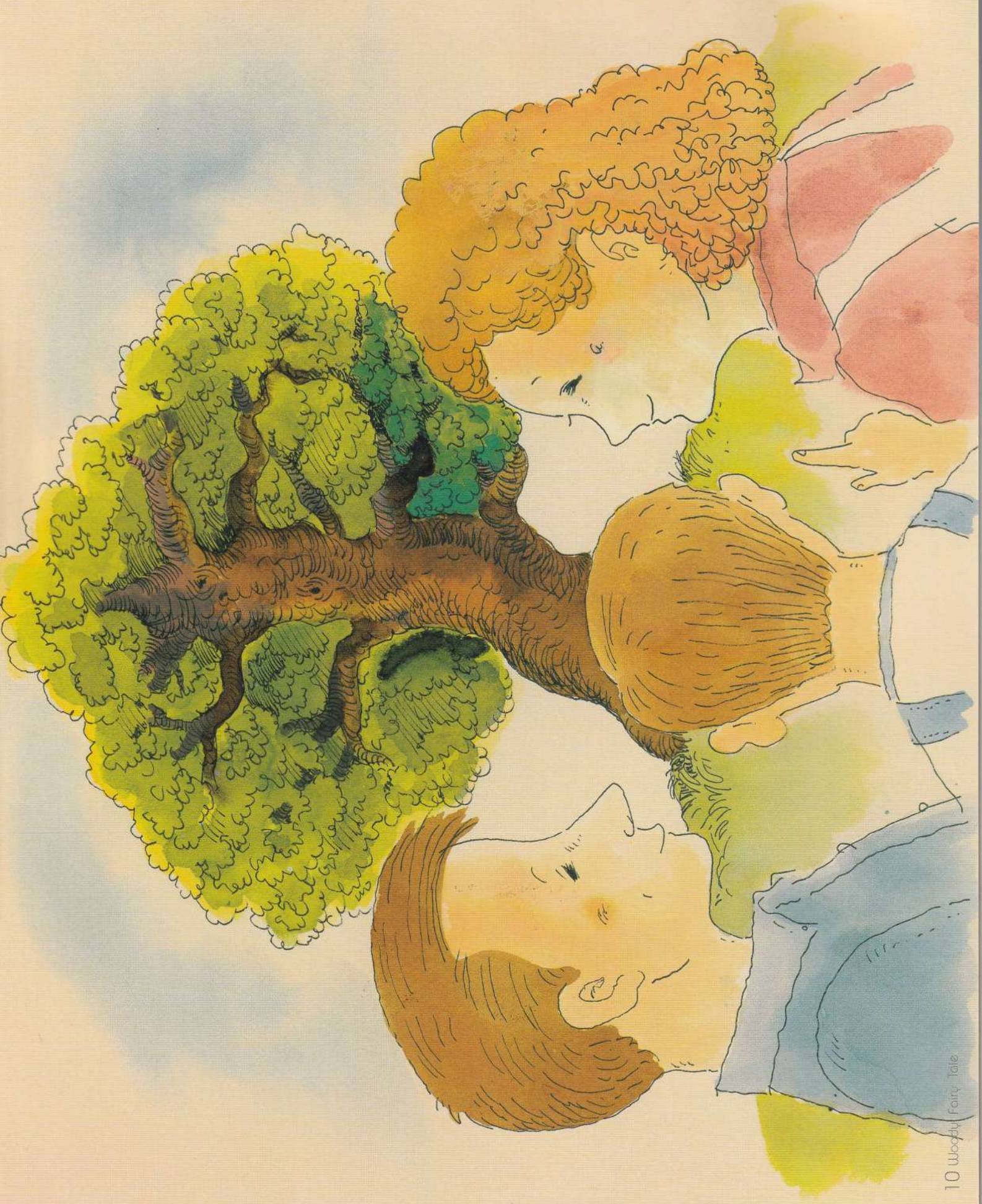


やがて、鳥たちが明るいきさえずりとともに、海のむこうからもどつてきました。どの木のこずえにも、小さな芽がいくつも顔をだしはじめます。春の訪れです。そして光かがやく夏。森の緑は力づよさをまし、生きる喜びをうたいあげているようです。そして、秋がきて、また冬に…。男の子と木はともに成長しました。やがて立派な若者となった男の子は、街でくらすために、この山をでていつてしまいました。木は、男の子をまちつづけました。彼に会えないことがとてもさびしかつたのです。静かな月の夜は、男の子のことをおもつて眠れないこともありました。近くでだれかの足音がきこえると、彼がもどつてきたのかとおもい、胸がときどきなりしました。もう、何回、春や夏、そして秋や冬がめぐつてきたのかもわかりません。

やがて木は、大きくなつたじぶんの葉っぱをつかつて男の子に手紙をかこうと思ひました。彼が山をでていつてから、もう三十年がすぎ、木もたくましく成長していたのです。しかし、木に文字がかけるわけではありません。そこで木は、お日さまのにおい、緑のにおい、この森のにおいを葉っぱにつめこんで、その一枚を枝からはなしました。木のねがいがつうじたかのように、葉っぱは風にのつて、どんどん山をくだつていきます。なかなか地面におちません。まわりの景色が、右ぐ左ぐどんどん飛びさつていきます。野をこえ、村をこえ、やがて高いビルがたちならぶ大きな街まで飛んできました。そして、古いアパートの一軒の郵便ポストめがけてまいりました。

次の朝、玄関のドアをあけてでてきた子供が、郵便ポストのなかの葉っぱを見つけて思わず声をあげました。なぜなら、この街はコンクリートの建てるものだけで、もう、すこしの自然ものこっていないから。もちろん、まわりを見まわしても、木は一本もはえていません。その声を聞いて、お父さんもでてきました。じつは、この人こそ、昔、小さな木を育ててくれた男の子だったのです。街で仕事を見つけ、結婚をして、いまではかわいい子供もいます。お父さんは葉っぱを手にとり、そのにおいをかいでみました。お日さまのにおい、緑のにおい、あの森のにおい……。お父さんの頭の中に、なつかしい風景がめぐりはじめました。「あの木は、どうしているだろう……」。なにか大切なものを思いだしたように、彼は一枚の葉っぱをずっと手の中であたため続けていました。

そうしてやってきた最初の日曜日、お父さんは家族をつれて森の中をあるいていました。きこりの父がなくなつてから、もう何十年とおとずれたことのないなつかしい山。でも、山道のところどころに測量した目じるしがついていた、トラックがはいたような大きな車輪のあとがのこっているのが気になりました。彼は幼いころの記憶をたよりに、小さな木を植えかえてあげた場所をさがしました。せせらぎの音がちかくなってきました。「きこど、このあたりだ」。そういって、顔をあげた彼のまえに、見あげるくらい大きな木がたっていました。年輪をかさねた太い幹、青空へ広がるたくさんの長い枝、太陽の光をあびて、さんさんとかがやく姿は、りりしいほどに立派です。この木こそ、彼が子供のときに植えかえ、育ててあげた小さな木だったのです。





「おかえり、ぼうや」。木はうれしそうに枝をゆらしました。地面へと深くのびた根から、水をいっぱいすいあげ、お父さんと家族にすずしい風をおくつてあげました。ながいこと忘れていた木との再会。それは、お父さんに幼いころの思い出をよびおこしました。今の暮らしからはとおざかつてしまった自然の風景や、きこりの父と暮らしていたなつかしい家のこと。そして、その家はこの森の木で建てられていたことも。

お父さんの家族はいま、アパートをひっこして郊外に新しく建てた家で暮らしています。ここには、まだ、緑がのこっているし、朝は小鳥たちの声でおこされることもあります。あの山に、ダム建設の話がもちあがっていて、森の木がすべて伐られることをしたのは、あの木に会いにいつからまもなくのことでした。そこで、彼は、森がきりくずされるまえにじぶんが育てた木を山からはびだし、そのまわりの木も何本か買って、この家を建てたのです。小さな木は、とても幸せでした。この家の天井や柱や壁になって、これから家族とともにすこせることができて……。木は伐られて家になることで、生きつづけることができるのです。まわりを見れば、あの山でともにすこした仲間の木も、おだかいを支えあいながらいっしょです。木は、いままでいえなかった「ありがとう」をお父さんにつたえたいと思いました。木が人とがよいあうために、昔から、もちつづけてきた自然のやさしさをもつて。木はあたえることの喜びをはじめてしたのです。



「自然がおしえてくれた」は、さりげない、光、雨、空気、土などを題材に、子供たちのやわらかな感性が感じとった世界を綴ったものです。

私たちは、今ふたたび、多くのものを自然から学びとろうとしています。

スローライフ、ナチュラルライフ、エコロジーライフ...

時代と手をつなぐこれらのライフスタイルは、すべて自然に根ざしたものです。

それは、地球とひとつに結ばれている人間の心の底の本能が、いま、自然と寄り添うこと、調和することを求めているような気がしてなりません。

未来へ向かうエネルギーにあふれる子供たちは、まわりの環境からさまざまなものを吸収し、学び取りながら成長していきます。

その学び取る場として、私たちがまず思い浮かべるのが学校です。

昔は大半が木造校舎だったのですが、今ではその大部分が鉄筋コンクリート造となっています。しかし、ここにきて無機質なガラスや鉄、コンクリートとは違う自然素材としての木の良さが、いろいろな調査や研究結果から明らかになり、内装や設備に木材を使う学校が多くなってきました。私たちも、ヒンヤリとしたスチールの机や椅子よりも、温もりのある木の机や椅子に自分たちの子供を座らせてあげたいものです。

教室を、なごみのある空間に変えるそんな木の魅力を、巻末の「三つのお話のしめくくり」で紹介しました。

そして、もうひとつ忘れてならないのは、そんな子供たちと接する大人たちのありようです。子供たちは、大人たちをとおして自分たちの姿を見ようとするからです。その確かな目で。

すこし肩が凝ってきたら、このお話にあるように、まぶしい光に、澄んだ空気に、爽やかな木の緑に会いにいきましょう。うんとリラックスして、深呼吸して、自然の息吹をからだで感じてみる。自然は、いつも人間らしい心を教えてくれます。

自然がおしえてくれた

光^{ひかり}がおしえてくれた

枝^{えだ}のあいだからこぼれるいっぱいの輝^{かがや}き

水^{みず}の上^{うへ}をとびはねるきらきらのダンス

まぶしい光^{ひかり}を見ると目^めのうらが日^ひ焼けする

光^{ひかり}は元^{げん}氣^きのもと

ここえるからだをあたためる日^ひなたの温^{ぬく}もり

体^{たい}操^{そう}着^ぎいっぱいにしみこんだお日^ひさまのにおい

太陽^{たいよう}にあたっていると、心^{こころ}の芯^{しん}がやわらかくなってくる

光^{ひかり}はどうめいな暖^{だん}炉^ろ

朝^{あさ}の光^{ひかり}はみずみずしいまぶしさ

夕^{ゆふ}焼^やけの光^{ひかり}はしみとおるかなしさ

めぐりくる一日^{いちにち}のなかで

光^{ひかり}の色^{いろ}はひとつじゃない

うらにできる影^{かげ}はみんな黒^{くろ}いの

お父^{とう}さんの顔^{かお}、お母^{かあ}さんの顔^{かお}

大^{だい}好^すきな友^{とも}達^{だち}の顔^{かお}

みんな光^{ひかり}が見^みせてくれる

目^めに見^みえるもの、心^{こころ}にうつるもの

空気がおしえてくれた

若芽のにおいにやわらぐ春の空気

ひりひりする熱気をはらんだ夏の空気

実りゆくしあわせがつまった秋の空気

しんとはりつめた肌をさす冬の空気

空気にはそれぞれの季節の気配がある

海がちかくなると潮のかおりがする

森へいくと木々のにおいがする

空気はまわりの景色をうつすにおいの鏡

すんだ空気を深呼吸する

頭のなかですっきりして、手足がのびてくる

愛も、やさしさも、空気も

見えないけれど、なくせないもの

たいせつなもの

おきているときも、眠っているときも

いつもからだのなかを

しずかに空気がめぐっている

雨^{あめ}がおしえてくれた

目^めをとじて、耳^{みみ}をすませば

雨^{あめ}の音楽^{おんがく}が聞^きこえてくる

しとしととふるしずかな曲^{きょく}

かみなりをつれたいさましい曲^{きょく}

屋根^{やね}もポストもベランダもくるまも

外^{そと}にあるものは、みんな雨^{あめ}に鳴^なる楽器^{がくき}

いろいろな音^{おと}をかなでながら

雨^{あめ}の日^ひがきたのをおしえてくれる

学校^{がっこう}へむかうこうもり傘^{かさ}のとりどりの色^{いろ}

水^{みづ}たまりをはねる子供^{こども}たちの長ぐつ

いきおいをますカエルたちの合唱^{がっしやう}

かわいた大地^{だいち}の上^{うへ}で、草^{くさ}や木^きや動物^{どうぶつ}たちは

雨^{あめ}をまち、空^{そら}を見あげる

とつぜんの夕立^{ゆぐだち}がいろんな汚^{きた}れを洗^{あら}いながす

そのあとに顔^{かお}をだした太陽^{たいよう}がすべてを輝^{かが}かせる

生きかえったみたいに

音楽^{おんがく}の余韻^{よゐん}をのこしながら

土^{つち}がおしえてくれた

土^{つち}のうえでころんでも

舗^ほ道^{どう}でころんだみたいになくなくない

ひざこぞうについた泥^{どろ}をはらって

また、かけだしてゆける

土^{つち}の色^{いろ}は、ふかい歳^{とし}月^{げつ}の色^{いろ}

いろんな想^{おも}いがいつばいつまった色^{いろ}

草^{くさ}花^{はな}を育て、虫^{むし}たちの卵^{たまご}をあたため

冬^{ふゆ}には動^{どう}物^{ぶつ}たちがその中^{なかに}に眠^{ねむ}る

かわらぬ母^{はは}のぬくもりにいだかれるように

天^{てん}から雨^{あめ}がたたいても

土^{つち}はゆっくりとその水^{すい}分^{ぶん}を吸^すってくれる

いちぶは空^{そら}へかえし、また雲^{くも}をうみ

のこりは地^ち面^{めん}にしみこんできれいな水^{みづ}をつくる

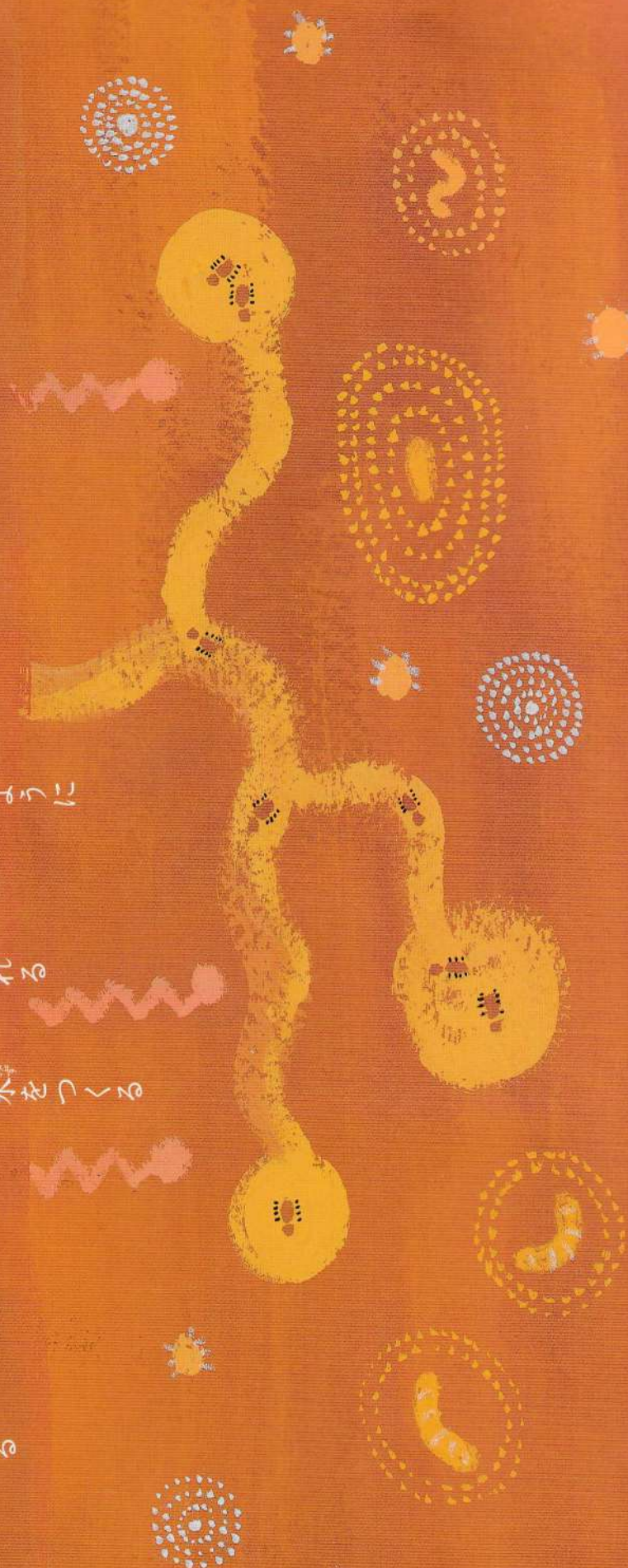
たがやせばたがやすほど、

土^{つち}はゆたかになる

おちた葉^はも実^みも、しんだ昆^{こん}虫^{ちゅう}も

みんな土^{つち}の栄^{えい}養^{よう}分^{ぶん}となつて

あたらしい生^{いのち}命^{めい}をはぐくむ準^{じゅん}備^びをする



木がおしえてくれた

公園に大きな枝をひろげるいつぼんの木

人がそこにあつまってくる

おとなたちはだまって気持ちをかよわせあい

子供たちはふとい幹にのぼって遠くをみつめ

老人たちはすすしい木陰にこよう

木の偉大さは、その高さ

ながいあいだ、立ちつづけたうごかぬ意志

一枚の若葉のきらめきは、どんな宝石よりもまぶしくて

落葉がしいたじゅうたんは、どんなベッドよりもあたたかい

鳥は木に巣をつくり、人は木で家をつくる

やがて未来へはばたこうとするものたちの

かけがえのない日々をはぐくむために

木はいつもむかえてくれる

木の家には森のにおいがする

陽と空気と水がしみこんだ

なつかしい肌ざわりがある

おしえてくれるものは言葉^{ことば}だけじゃない

目^めにうつるもの、耳^{みみ}にとどくもの

手^てにふれるもの、どこかがかんじるもの

子供^{こども}たちは、かわいたスポンジ

どんな小^{ちひ}さな一^{ひと}滴^とものがさない

流^{なが}されゆくものにまようとき

かわらない自然^{しぜん}が、心^{こころ}をつなぎとめてくれる

やさしさをひきよせてくれる

さあ、手^てに手^てをかさねて

そのぬくもりをつたえあおう

小^{ちひ}さなからだから、まっすぐに

のびてくる気持^{きもち}ちをうけとめよう

一^{いっ}点^{てん}のくもりのない心^{こころ}と心^{こころ}

じふんたちのひとみに

子供^{こども}たちのひとみをうつして

のびゆくからだはいつも明^あ日^{にち}にむかっている



「終わりはないの？」は、女の子が野山で遊んだ一日をきっかけとして、地球や自然について考えていくお話です。

みなさんもご存じのとおり、環境破壊は人類共通の深刻な問題であり、国境を越え、また世代を越えて、国際社会がひとつになり取り組まなければ解決できないものです。

私たち生活者も、社会・経済活動をエコロジー型へとシフトする上で、その行動や暮らし方に、環境問題をになう一員としての自覚が求められています。

省エネルギー、資源の有効活用、リサイクル化へ向けて、いわば一人一人がその推進役。私たちの家庭の台所は海へとつながり、消費するものは地球の資源とつながり、使うエネルギーは大気とつながっていることを忘れてはなりません。そして、次代を担う子供たちへ向けて、環境や自然を大切にする心を育ていくことも、私たち大人の責任です。

地球温暖化や酸性雨、絶滅を続ける野生動物など、これらのすべては、生態系に異変がおこり、自然の循環がおかしくなってきたことを意味します。

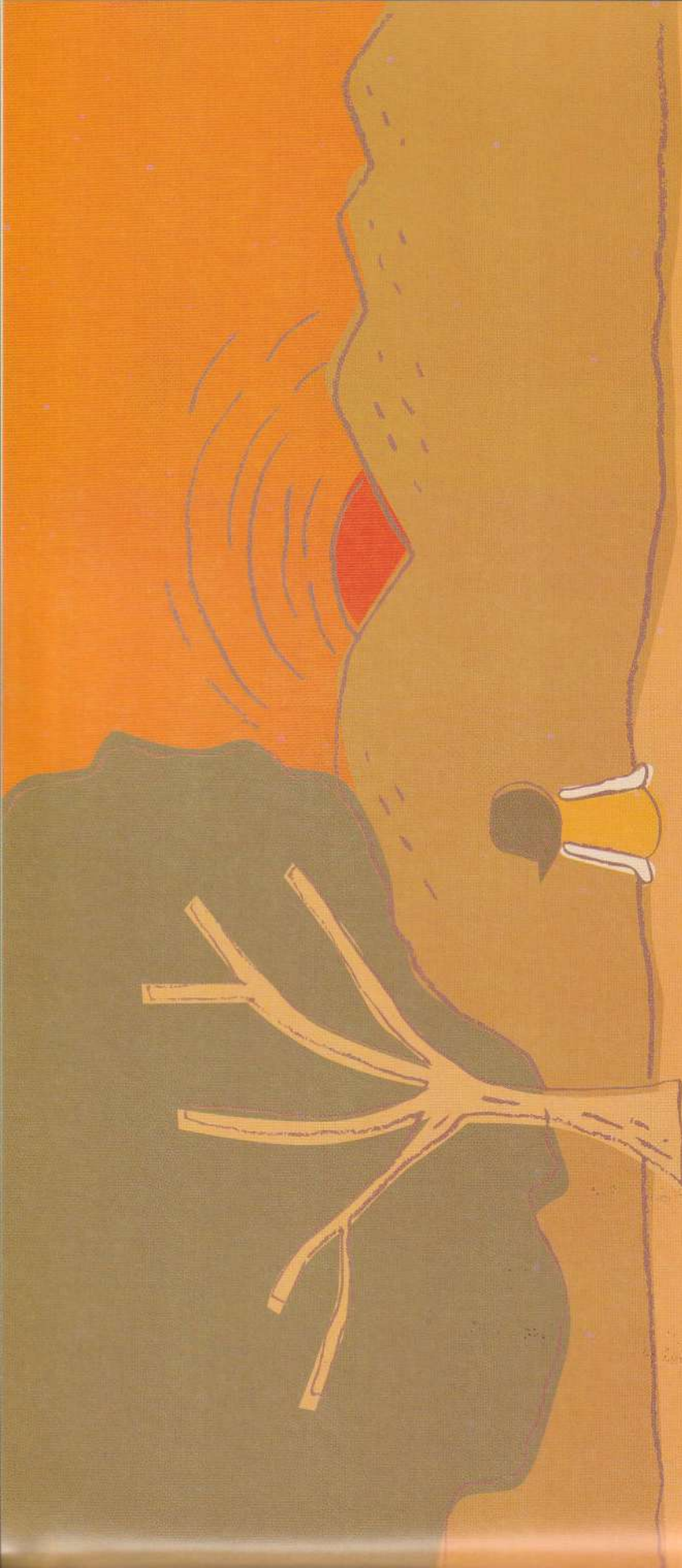
この自然の循環ということを考えれば、私たちの身近なところでは森林の問題があります。日本人は昔から、地元の木材を建材や道具、燃料などに利用し、生活の中に取り入れてきました。しかし、輸入材の増加などにより、国産材の価格が低迷。林業経営がたちゆかなくなり、手入れの行き届かない状況に陥っている山々もあります。

伐採されない森林は、老木から若い木への森林資源の循環を妨げ、山の荒廃を招きます。それが、土砂災害を呼び、森に生きる動植物や、川をへつながる海の生態系にも悪い影響を与えているのです。

このお話が伝えたいことは、未来へ続く循環。受け継がれていくかけがえないもの。つながる、時間と自然と生命。

そして、森林問題の解決策として身近な木を使うことが、いかに環境保護に貢献できるのかを、巻末の「三つのお話のしめくくり」で紹介しました。

終わりはなの？



太陽^{たいやう}がかくれんぼするみたいに
遠^{とほ}くの山^{やま}にじずまつとしています。
空^{そら}はオシ^{おし}シ^しコースをすい^{すい}んだも^もこに
だ^{だい}だ^{だい}色^{いろ}にそまつしています。
女^{おんな}の子^こは、ち^ちき^きから丘^{かみ}のう^うえにすわ^{すわ}つて
このきれいな夕^{ゆふ}焼^やけをすこ^{すこ}と見^みていました。
草^{くさ}のあ^あいだの虫^{むし}た^たちの合^あ唱^{うた}が
だ^だん^{だん}と大^{だい}き^きく^くな^なつてき^きま^ました。
鳥^{とり}たちもひ^ひと^とこに^にか^かた^たまつて
山^{やま}のぼ^ぼつ^つく飛^とんでい^いき^きま^ます。
そ^そろ^ろそ^そろ帰^{かへ}ら^らな^ないと、お^おじ^じい^いち^ちゃ^ゃん^んが
心^{こころ}配^{はい}してち^ちが^がし^しにく^くるか^かも^もし^しれ^れま^ませ^せん。
女^{おんな}の子^こは、学^{がく}校^{こう}が夏^{なつ}休^{やすみ}み^みに入^いる^ると^とす^すぐ^ぐに
田^い舎^なのお^おじ^じい^いち^ちゃ^ゃん^んの^の家^{いえ}く
は^はじ^じめ^めてひ^ひと^とり^りで遊^{あそ}び^びに^にき^きま^ました。
な^なれ^れか^から一^{いっ}週^{しゅう}間^{かん}、な^なつ^つに^にまつて
小^{せう}さな冒^{ぼう}険^{けん}王^{わう}に^にな^なる^るん^んだ^だと
い^いき^きな^なつて^てい^いる^るの^ので^です。

今日、女の子は、一日じゅう野山をかけまわりました。

小川のなかでは、ちいさな魚が足をつつきました。

水のなかの石をひっくりかえしたら

沢ガニの親子がおどろいてとびだしてきました。

まるでネコになった気分で

草のうえに寝ころびました。

木につるしたハハモックのうえで

ハハモ二カもぶきました。

水筒に入れてもつていった冷たいしもん水の

なんておいしかったこと。

空も、風も、森も、川も

どうしてこんなに気持ちがいいのでしょうか。

まるで、自然の遊園地であそんでみたい…。

女の子は、そう思いました。

夜、ベッドに入ってから

そんなことが頭のなかにうかんできて

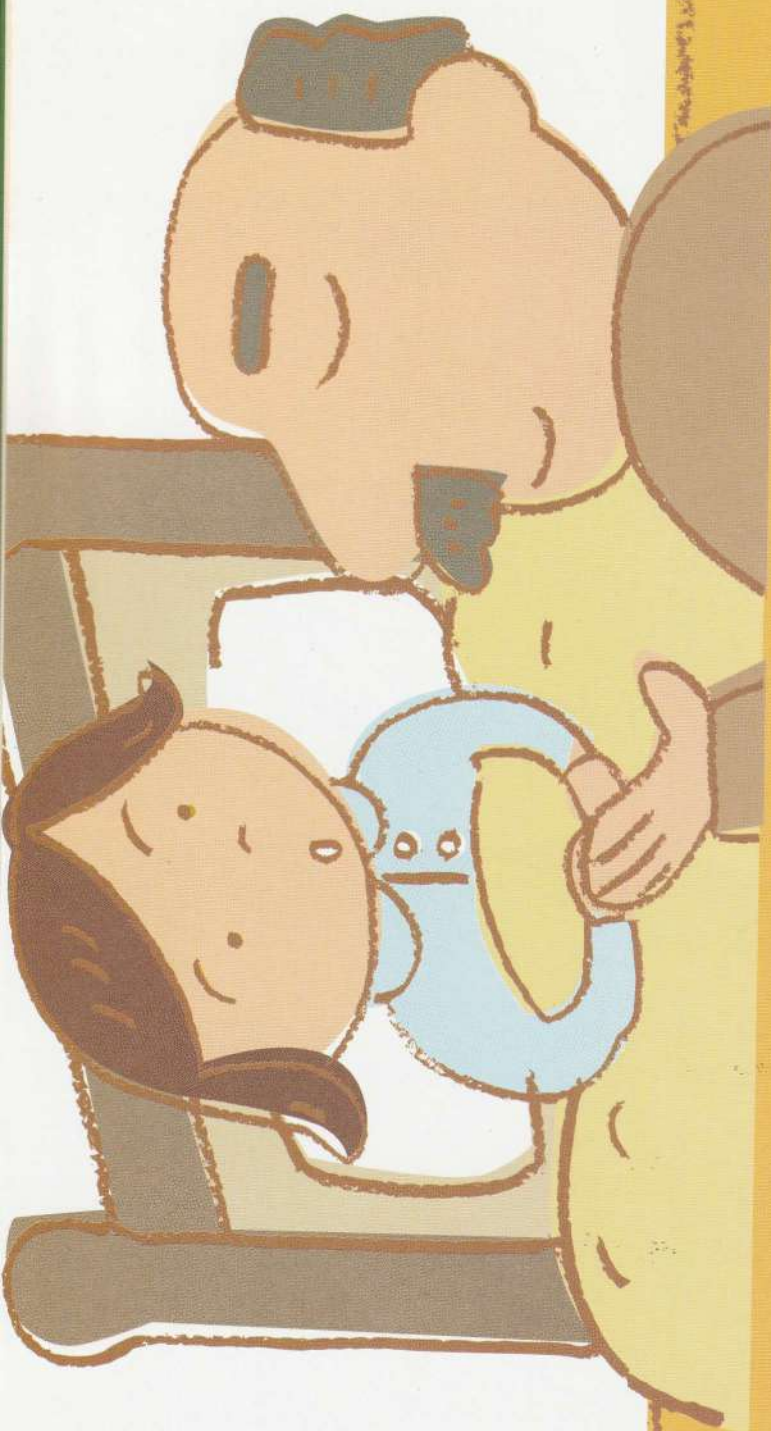
なかなか眠れません。

そこで、女の子はおじいちゃんを

呼んで、眠くなるまで、お話をして

もらうことにしました。





『どうしてお日さまはしずんでしまうの？』

今日、ながめたきれいな夕日を思いだしながら
女の子はおじいちゃんにだすねます。

「みんながぐっすりと眠れるように、暗くて
しずかな夜とこうたいするからさ」

『でも、わたしが目覚めたときには
また朝がきている』

「そう、朝と夜はじゅんぐりにめぐってくる。
時間は止まることなく流れているんだよ」

『けど、きょう、わたしが寝ころがった草や
ぶらさがった木の葉っぱは
みんな青々としていたけど
冬になるとみんな枯れてしまうわ』

「それは、つぎの季節をむかえる準備を
しているからなんだよ。
また春がきて、夏になれば、野山は
今日みたいに緑や花でいっぱいになる」

『季節もまためぐっているのね』

「そう、めぐる季節のなかで
人はいっぱい思い出をつくって生きているんだよ」
遠くでツクロウが鳴いています。

あたりはしずかで、月の光が入る部屋のなかに
ふたりの声だけがひびいています。



『谷川の水は、なんであんなにきれいななの？』

ベッドにのばした女の子の足には

ひんやりとした水をつめたさや

ふみつけた小石のくすぐったい感触が

まだのこっています。

『それは、森にふった雨が、土のなかを

とおってきれいな水になるからだよ。

その水があつまって川になる。

だから、森を流れる川の水はとつてもきれいで

つめたくて、魚たちのすみかとなつたり

動物たちののどをうるおしてくれるのさ』

『川の水はどこいくの？』

『海まで流れていって、こんどは魚や貝など

海の生きものたちをそだててくれるんだよ』

『自然はひとつにつながっているのね』

おじいさんは女の子の言葉にうなずき

その小さなほほをやさしくなでました。

『森のなかを散歩したり、草のうそに寝ころんだり
すると、どうして気持ちがいいの？』

「それは、人も自然のひとつだからなんだよ」

『えっ、わたしも、あの草や木の仲間なの？』

「むしろだけじゃない。動物も、魚も、昆虫も」

この地球に生きているものは

みんなおなじ自然の仲間なんだよ」

『だって、ぜんぜん顔やかたちがちがちのじ』

「たとえ顔やかたちがちがちでも、みんなおなじ

生命というものをもっているじゃないか。

それは、どんなものにも

たつたひとつきりしかないんだよ。

さあ、思いだしてごらん

今日、出会ったすがすがしい空気を

やわらかな草の感触を、きれいな花のしおいを」

おじいさんの言葉に、女の子はじつと目をうじて

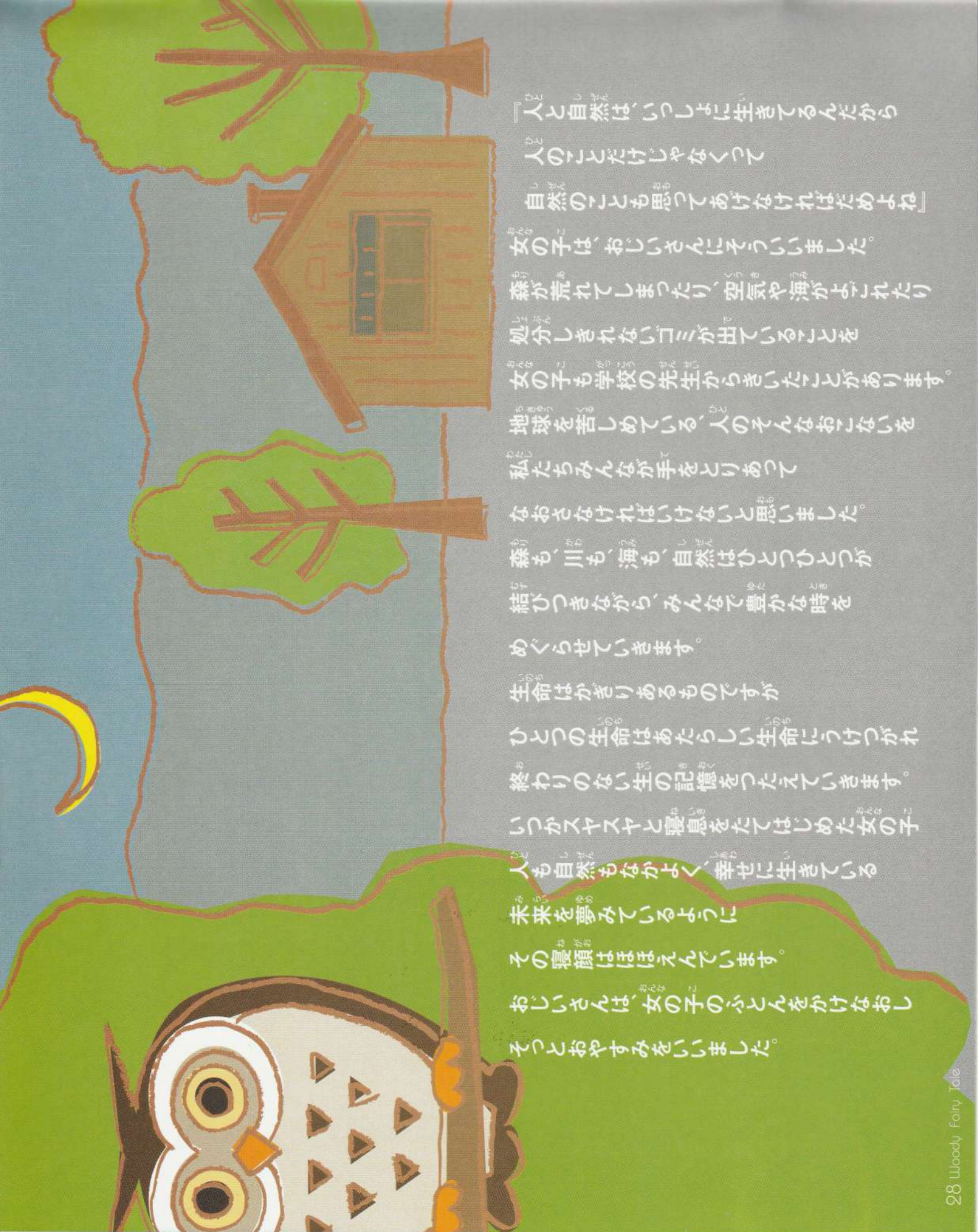
そんな風景を頭のなかにえがいてみました。

『ほんと、私のからだのなかの“生命”が

気持ちいって感じてる』

女の子は、ふと、そんな気がしてきました。





『人と自然は、いっしょに生きてるんだから
人のことだけじゃなくつて

自然のこととも思つてあげなければだめよね』

女の子は、おじいさんにそういいました。

森が荒れてしまつたり、空気や海がよこれたり
処分しきれないゴミが出てくることを

女の子も学校の先生からきいたことがあります

地球を苦しめている、人のそんなおこなさを
私たちみんなが手をとってあつて

なおさなければいけないと思ひました。

森も、川も、海も、自然はひとつひとつが
結びつきながら、みんなで豊かな時を

めぐらせていきます。

生命はかぎりあるものですが

ひとつの生命はあたらしい生命につけつがれ
終わりのない生の記憶をつたえていきます。

いつかスヤスヤと寝息をたてはじめた女の子

人も自然もなかよく、幸せに生きている
未来を夢みているように

その寝顔はほほえんでいます。

おじいさんは、女の子のふとんをかけなおし
そつとおやすみをいいました。

三つのお話のしめくりに

それぞれのお話を読んだ後に、ぜひ、こんなことも子供たちに教えてあげてください。



「家になった木」

健康

Healthy



小さな木は家となつて、どんな自然のやさしさでお父さんとその家族に“ありがとう”の気持ちを伝えたのでしょうか。それは、木だからこそ人と通い合うことができる、このような特徴によつてです。

木の家は健康を育むやさしさ

湿度のバランスを調節する

木は、まさに天然のエアコン。室内の湿気が多くなると吸収し、乾燥してくると水分を放出する働きがあります。そのため、ムクの木材を内装にたくさん使えば、室内の湿度変化も少なくなり、快適さを実感することができます。

ストレスを緩和し、リラックスさせる

木に触れると血圧が低下し、リラックスした状態になります。その色合いと自然が生んだ木目は“あたたかさ”や“安心感”を見た人に与えます。また、木は、すがすがしいマイナスイオンの発生源ともなります。

殺菌作用でアレルギーを予防

木の香りにふくまれるフィトンチッドには殺菌や消臭効果があります。また、ヒノキやヒバには、ダニやカビの繁殖を抑える効果があり、アレルギーの予防にも役立ちます。

空気の汚染源を排除する

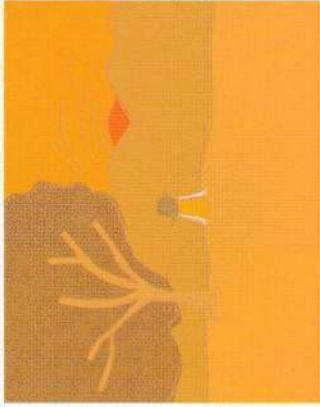
高気密・高断熱の上に新建材を多用した住まいは、ホルムアルデヒドなどの有害化学物質が室内に充満し、頭痛や目の痛み、ぜんそくなどをひきおこします。内装材にムクの木材を使用することで住環境の汚染を改善することができます。

「自然がおしえてくれた」

教室

子供たちが一日の大半を過ごす学校、教室という室内環境は伸びゆく心と体に大きな影響を与えます。もし、そこが木にかこまれた空間なら、こんなにたくさんのメリットを子供たちに与えてくれます。

ゆとりと潤いを生む木の教室



「終わりはないの？」

「森はどのようにして地球の空気を浄化しているの?」「木材はどうしてエコロジックな素材なの?」「そんな森林資源の果たす役割を見直し、木材を活用することの意義を分かちあえば、環境へのやさしさを差し伸べていく手と手はさらに広がることでしよう。

地球環境の浄化に役立つ森林資源

木は炭酸ガスの貴重な吸収源。

森林の樹木は光合成の働きで、地球温暖化の原因となっている CO_2 (炭酸ガス)を体内に吸収してくれます。そして伐採され、住宅や家具などになっても燃やしてしまわないかぎり、炭酸ガスを自らの体内にとじこめ続け、大気中への放出を防ぎます。

森林資源の健全な循環。

いくら樹木が炭酸ガスの吸収源だからといっても、老木となれば当然この吸収力も落ちてきます。そこで充分に成長した木を伐採し、 CO_2 (炭酸ガス)の次の担い手となる樹木を育てることが必要となります。木材をたくさん利用して、新しい木を植林することで、再生可能な資源である森林の健全な循環が生まれます。

省エネルギーで生産できるエコロジック素材。

木は建材となるまでに多くのエネルギーを必要としません。天然乾燥の木材であれば、1トン生産するのに30kgの炭素放出ですみますが、鋼材はその23倍、アルミニウムはなんと200倍ものエネルギーを必要とし、それだけ地球環境にダメージを与えることになります。

利用拡大に向けたバイオマスエネルギー。

現在、世界で消費されるエネルギーの約90%が石油や石炭などの化石燃料によつてまかなわれています。しかし、これらは限りある資源であり、その代役となる原子力発電も危険が伴うものです。そこで注目されるのが、木材や麦わら、植物のかすなどの再生可能な生物資源によるバイオマスエネルギー。燃焼や発酵という形で利用され、大気中に放出される CO_2 (炭酸ガス)量を抑えることができます。

子供たちの情緒を安定させる。

木の香りは精神を安定させる作用があります。また、木の床は熱が奪われにくいので、足が冷えて子供たちが落ち着きをなくすことが少なくなります。さらに、木は高い吸音率をそなえており、音がこもらないことも疲れにくい原因のひとつです。

木造校舎は、先生や子供から好評。

先生や生徒からも、鉄筋コンクリート造と比較して木造は「授業に集中できる」「眠気やだるさが少ない」「疲れない」といったプラスの評価が出ています。最近、骨組みは鉄筋コンクリート造でも、内装や設備に木を利用する学校が増えているのは、そんな理由からなのです。

ケガや風邪の発生率が少ない。

木の床は歩きやすい適度の弾性と、衝撃吸収力を備えているため、転んでもケガをしにくく安心感があります。また、森林浴を思わせる殺菌効果により、風邪の発生率が鉄筋コンクリート造より木造の校舎の方が少ないというデータも出ています。

物を大切にする心を育くむ。

木という素材は、先生からも、「掃除の効果があらわれる」、「みがくと光る」と評価されています。実際に、児童が木の「傷つきやすい」、「汚れやすい」といった特性を知り、物に落書きしたり、粗末に扱うことをやめるようになった例が報告されています。机や椅子、収納棚など、学校の設備や備品に木を使うことで、生徒の生活習慣の向上に役立つはずです。

けん木れん

企業 静岡県木材協同組合連合会 発行

〒420-8601 静岡市追手町9番6号 県庁西館9階
TEL.054-252-3168 FAX.054-251-3483
e-mail : s-mokuren@mail.wbs.ne.jp
http : //www2.wbs.ne.jp/~smokuren

※本資料の無断転載を禁じます。

